

答申書

門 適 審 第 15 号
令和 2 年 2 月 28 日

門 真 市 教 育 委 員 会
教育長 久木元 秀平 様

門 真 市 学 校 適 正 配 置 審 議 会
会長 横山 俊祐

門真のめざす教育とこれからの学校づくりについて（答申）

平成 31 年 2 月 21 日門教総第 776 号にて門真市教育委員会教育長から諮問のありました「門真市学校適正配置審議会第 3 次答申における提言の再検討について」及び「小中一貫校」、「義務教育学校」等の考え方も含めた、今後の小・中学校のあり方について」について、ここに答申します。

門真のめざす教育と
これからの学校づくりについて

答 申

(第 4 次)

令和 2 年 2 月 28 日

門真市学校適正配置審議会

目 次

はじめに	1
1 教育委員会からの諮問	2
2 門真のめざす教育とこれからの学校づくりの方向性	3
(1) 門真のめざす教育	4
(2) 門真のめざすこれからの学校づくり	7
3 学校の再編にあたっての基本的な考え方	10
(1) 「人とのつながりを創っていく」ための検討	10
(2) 「これからの時代、これからの門真」に向けての検討	11
(3) 「快適で楽しく過ごせる学校」に向けての検討	11
4 具体的提言	12
(1) 第四中学校校区内の小学校及び中学校の再編について	12
(2) 第四中学校校区、第五中学校校区の校区変更について	13
(3) 第五中学校校区の再編について	14
5 これからの門真の学校づくりについての留意事項	15
おわりに	16

はじめに

門真市では、平成 10（1998）年の第 1 次学校適正配置審議会を皮切りに、時代の変化に合わせた学校再編に取り組まれてきています。

少子化、グローバル化、A I の活用による技術革新等、激しく変化する現代社会において、子どもたちはその変化に対応し、また、自分たちを取り巻く社会の課題に向き合い、解決しようとする力を付ける必要があります。こうした力を付けるためには、子どもたちが物事に対して受身で関わるのではなく、能動的に関わることが大切となることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点を持った授業を行うことが重要であると言われており、教育の内容もまた、社会の変化を見据えた新たな学びへと変化しているところです。

このように、子どもたちを取り巻く環境や、教育内容は急激に変化しており、この変化にしっかりと対応していくためには、従来の学校のあり方から大きく変わらなければならない時が来ています。

さて、本審議会は、門真の教育の施策を着実に具体化するために平成 28（2016）年～平成 30（2018）年に開催された「門真市魅力ある教育づくり審議会」で出された提言のうち、「横のつながりや縦のつながりなど、多様な人間関係の構築をとおして主体的に学び合える学校環境づくり」、「すべての子どもにとって安全で優しく、充実した学校施設のあり方」について、さらに検討を進めていくために、門真市教育委員会より諮問を受けました。

学校のあり方が問われている中、門真市でも良いタイミングでこのような審議会が開催されることとなり、将来に向けたこれからの学校について議論することができました。具体的な議論にあたっては、適正な学級数といった数の議論だけをすれば良いということではなく、これからの時代を担う門真の子どもたちに必要な教育はどのようなものであるのか、また、これからの時代に対応した学校はどのようなものか、ということについて多くの時間を費やしたところがあります。その中で、多様な人間関係を構築する必要性や、地域と共にある学校のあり方等についての様々な意見が出され、「人と人とのつながり」をキーワードに、これからの学校づくりの方向性を示しました。

この度、全 8 回の審議を終え、これまでの審議の結果を取りまとめましたので、ここに答申します。門真市教育委員会においては、この答申を基に、門真がめざす「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育」の実現に向けた学校づくりが真に進められることを期待しています。

1 教育委員会からの諮問

本審議会は、門真市附属機関に関する条例（平成 25 年門真市条例第 3 号）別表 2 号の表門真市学校適正配置審議会の項の規定に基づき、門真市教育委員会から次の 2 点について諮問を受け、審議を行いました。

- 1 門真市学校適正配置審議会第 3 次答申における提言の再検討について
- 2 「小中一貫校」、「義務教育学校」等の考え方も含めた、今後の小・中学校のあり方について

2 門真のめざす教育とこれからの学校づくりの方向性

まず、本審議会の役割は、第3次学校適正配置審議会答申（平成20（2008）年12月）の再検討の場であるとともに、門真のめざす教育の姿を実現するために、学校をどう創っていくのかを検討する場であり、これからのより良い学校づくりに向け、さらに議論を深める場であることを確認しました。

第3次学校適正配置審議会答申の提言内容を再検討するにあたっては、既に10年以上が経過し、子どもたちを取り巻く環境や、教育内容が大きく変化していることから、本審議会では、まず、これからの門真の子どもたちにどのように育ててほしいか、そのためにどのような教育をしていくのかといった、門真のめざす教育の姿を考えました。その上で改めて、それらを実現できるこれからの学校を、限られた予算の中でどのように創っていくのかという視点で、議論を進めることとしました。

(1) 門真のめざす教育

これからの時代を生きる子どもたちにとって、どのような教育が必要であるのかということについて、門真の子どもたちの現状も踏まえながら議論を行いました。

その中で委員から、子どもたちの自立に向けては、人と人とのつながりが大切であり、豊かなつながりの中で育ててほしいという強い思いが述べられ、3つのつながりを軸として、次のとおりまとめました。(図1)



【図1】将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育(審議会のまとめ)

① 「縦のつながり」

「縦のつながり」とは、異年齢や異学年、また、大人も含めた様々な年齢の人との関わりでできるつながりです。このつながりによって、子ども自身が自分の将来への具体的なイメージを抱くことができたり、あのようにになりたいという憧れの気持ちを抱いたり、子どもたちの中に優しさや包容力が備わることが期待されるのではないかと結論が出されました。

こうした「縦のつながり」を創るため、門真市では、平成19(2007)年度より小中一貫教育の推進に取り組んできたところではありますが、変化の激しい現代社会において、小・中学校の9年間を通して子どもたちを

育てていくことや、小学校から中学校へスムーズな接続ができるようなリレーゾーンを創り、小中間の段差を緩やかにしていくことがますます重要となってきており、小中一貫教育の更なる推進が求められています。また、少子化等の影響により、地域の中でできる異年齢間のつながりが希薄になりつつあり、子どもたちが「縦のつながり」の中でお互いに成長していくことができるような環境を大人が意図的に創っていくことも必要です。

このような観点から、小中一貫校（義務教育学校）は、異年齢、異学年のつながりの中で育つことができる場所となり得るものであり、「縦のつながり」を創るための有効な手段の1つであると考えられます。下級生にとっては、憧れの気持ちや将来の展望が持てるとともに、上級生にとっては、優しさや責任感が生まれるなど、双方にとって相乗効果があると考えられ、とりわけ、施設一体型の小中一貫校（義務教育学校）は、9学年の子どもたちが同じ場所で共に過ごすということから、こうした効果がより一層高まると期待されます。

また、「縦のつながり」を創ることで、保護者や周りの大人にとっては、9年間という長いスパンで子どもの成長を考えることができ、教職員にとっては、体格の差や、小・中学校の慣習の違いといった課題の解決に向け、それぞれの教職員が同じ目標に向かって取り組むことにより、つながりや一体感、意識の変化が生まれてくること等も考えられ、様々な面で好影響が期待されます。

② 「横のつながり」

「横のつながり」とは、同学年、同級生、また、学校を越えた子どもどうしとの関わりや、地域の人や保護者との関わりによってできるつながりです。このつながりを通して、多様な人間関係を構築しながら、その中で様々な考えに触れ、人とつながる力を身に付けることができるとともに、子どもを真ん中に、学校と地域が一緒になって子どもの成長を見守ることができるのではないかと結論が出されました。

「横のつながり」を創るためには、同年齢の子どもどうしに関わりが大切となりますが、あまりにも少ない人数では、多様な仲間と共に人とつながる力を身に付けていくことや、切磋琢磨しながら成長していくことが難しくなる場合もあり、子どもの成長に少なからず影響があるものと考えられます。子どもどうしの「横のつながり」が一層豊かになるような環境を創っていくことが必要です。

また、地域の人や保護者と関わることで、人とつながる力を身に付け

ることができると考えられるため、地域の様々な立場の人が学校と関わる機会を増やしていくことが求められます。地域は、子どもたちや学校に協力したいという方や、色々な分野の知識や知恵を持たれた方がいる、言わば人材の宝庫です。学校としても地域の方々の力を借りたいという思いを持っているので、それぞれの思いを把握し、さらに効果的な取組ができるような仕組みを創ることができれば、これまで以上に地域と学校がつながっていくのではないかと考えます。

人と人とのつながりの中で子どもたちを育てていくためには、これからの地域と学校のあり方は極めて重要であり、地域に開かれた学校づくりという視点を大切にしていくことが、今後ますます重要となります。この地域に開かれた学校づくりを行っていくことで、子どもの成長はもちろんのこと、保護者どうしや地域の中での人と人とのつながりもさらに増え、学校を中心とした地域のつながりの中で、子どもたちを多くの目で見守っていくことができるものと考えられます。

③ 「将来の自分とのつながり」

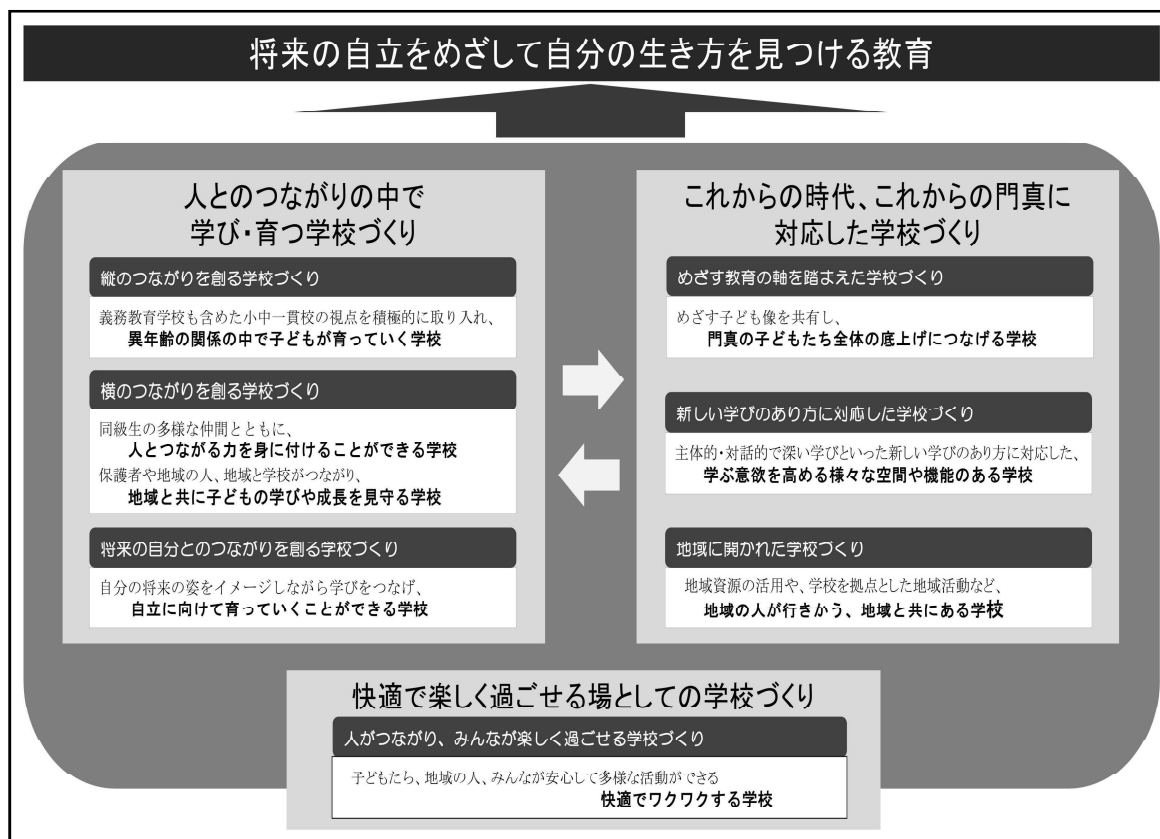
「将来の自分とのつながり」とは、子どもたちが成長する過程において生じる人とのつながりや、そこから得た学びを、成長段階に応じて積み重ね、今の自分と将来の自分とをつなげて考えることででき上がってくるつながりです。このつながりを大切にすることで、子どもたちが将来の姿をイメージしながら成長することができ、自立に向けて育っていくことにつながるのではないかという結論が出されました。

「将来の自分とのつながり」を創るためには、子どもたちが将来の自分の姿を具体的にイメージでき、その自己実現に向けて、主体的、そして意欲的に学び、取り組むことができるような教育活動が必要です。そのためには、学校や地域における将来のモデル像となり得る出会いを増やしてあげることが大切となることから、異年齢、異学年の仲間と9年間学びをともにする小中一貫校（義務教育学校）や、地域の人が行きかう、地域と共にある学校づくりを考えることが重要です。

この3つのつながりを大切に、人とのつながりの中で、子どもたち一人ひとりが自分の生き方を見つけてほしいという思いをみんなが共有し、様々な立場の人と共に、一貫性や系統性を持って子どもたちを見ていくことで、子どもたちの自立をめざした教育を進めていく、という内容が審議され、門真のめざす教育として、「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育（図1）」とまとめることとしました。

(2) 門真のめざすこれからの学校づくり

門真のめざす教育を実現するこれからの学校づくりの方向性について議論し、次のとおりまとめました。(図2)



【図2】 門真のめざすこれからの学校づくり (審議会のまとめ)

① 人とのつながりの中で学び、育つ学校づくり

「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育」という門真のめざす教育の実現に向け、人とのつながりをキーワードにした学校づくりが大切であり、3つのつながりを創る学校として、次のように整理しました。

○ 「縦のつながり」を創る学校づくり

義務教育学校も含めた小中一貫校の視点を積極的に取り入れ、異学年の関係の中で子どもが育っていく学校

○ 「横のつながり」を創る学校づくり

同学年の多様な仲間と共に、人とつながる力を身に付けることができる学校

保護者や地域の人、地域と学校がつながり、地域と共に子どもの
学びや成長を見守る学校

○「将来の自分とのつながり」を創る学校づくり

自分の将来の姿をイメージしながら学びにつなげ、自立に向けて
育てていくことができる学校

② これからの時代、これからの門真に対応した学校づくり

門真のめざす教育や、新しい学習内容を効果的に行うことができる
学校、学校を中心とした地域と共にある学校が大切であるということ
を踏まえ、これからの時代、これからの門真に対応した学校づくりとし
て、次のように整理しました。

○めざす教育の軸を踏まえた学校づくり

めざす子ども像を共有し、門真の子どもたち全体の底上げにつ
なげる学校

○新しい学びのあり方に対応した学校づくり

主体的・対話的で深い学びといった新しい学びのあり方に対応
した、学ぶ意欲を高める様々な空間や機能のある学校

○地域に開かれた学校づくり

地域資源の活用や、学校を拠点とした地域活動など、地域の人
が行きかう、地域と共にある学校

③ 快適で楽しく過ごせる場としての学校づくり

学校は、子どもたちの学びの場としてはもちろんのこと、地域の方も
含めた、みんなが過ごす場としての学校であるということから、みんな
が、安心して過ごすことができ、快適に楽しく活動できる場としての学
校づくりが大切であると整理しました。

○人がつながり、みんなが楽しく過ごせる学校づくり

子どもたち、地域の人、みんなが安心して多様な活動ができる快
適でワクワクする学校

①及び②については相互に関連している要素もあり、また、③については①、
②の内容を含めた全体を包括するものだと議論されました。

以上の内容は、今後の門真の学校づくりにおいて非常に大切な視点であり、
この視点を盛り込んだ学校づくりを通じて、「将来の自立をめざして自分の生

き方を見つける門真の教育」を実現し、子どもたちを育てていきたいという審議会の思いが込められています。

3 学校の再編にあたっての基本的な考え方

具体的な再編のあり方・学校配置については、人とのつながりの中で学び・育つ学校、これからの時代、これからの門真に対応した学校、快適で楽しく過ごせる場としての学校という視点を大切に、これからの時代を担う門真の子どもたちのための学校づくりを、未来志向で、かつ、今の大人が責任を持って考えるという視点に立ち、以下の観点を踏まえ、検討を行いました。

(1) 「人とのつながりを創っていく」ための検討

① 児童・生徒数を考慮した検討

児童・生徒数が今後も減少する見込みの中、子どもたちが多様な人間関係の中で学び、人とのつながりを創るためには、一定数の児童・生徒が共に学び、「横のつながり」や「縦のつながり」の中で育つ環境が必要となる。既に単学級になっている、また、将来的に複式学級となることが見込まれる場合等には、速やかに検討する必要があるのではないかと。

② 校区の広さ（人的資源を含む）を考慮した検討

これからの学校運営を考える上では、地域と共に子どもたちを見守ることや、学校を拠点とした地域コミュニティづくりが極めて重要となる。これまで以上に「横のつながり」を豊かにすることや、地域で生きる人々との出会いを増やし、「将来の自分とのつながり」を創っていくため、校区を広げることにより、地域の中で子どもたちを支える人材を確保するといった視点を検討する必要があるのではないかと。

③ 小中一貫校（義務教育学校）設置の可能性の検討

義務教育9年間というスパンで子どもたちの学びや成長を考える視点に立ち、小中一貫教育を一層進めていくためには、学校のあり方も大きな要素の1つとなると考えられる。このことから施設一体型での小中一貫校（義務教育学校）の設置の可能性についても、「縦のつながり」や「将来の自分とのつながり」を創るための有効な手段の1つとして検討が必要ではないかと。

(2) 「これからの時代、これからの門真」に向けての検討

「これからの時代、これからの門真」に対応した学校づくりについては、市全域の学校で考える必要があるため、短期的、中期的、長期的に門真の学校をどのように再編していくのかということを適切な順序で検討していく必要があるのではないか。その際、門真の小学校は、旧村の4つの小学校（門真小学校、大和田小学校、四宮小学校、二島小学校）から分離設置されてきた歴史や、これまでの再編の経緯も考慮しながら検討する必要があるのではないか。

(3) 「快適で楽しく過ごせる学校」に向けての検討

高度成長期の人口急増に合わせて、同時期に建設された門真の学校は、そのほとんどが建設後、既に40年以上が経過している現状があり、改修や建替えを行う時期に来ている。快適で楽しく過ごせる場としてのこれからの学校づくりを考えるにあたっては、学校施設の築年数や過去の大規模改修の状況等を考慮した検討が必要ではないか。

4 具体的提言

(1) 第四中学校校区内の小学校及び中学校の再編について

【現状を踏まえての提案】

学校の再編にあたっての基本的な考え方に基づき市全域を検討したところ、「人とのつながりを創っていく」という観点においては、第四中学校校区の砂子小学校の児童数が、令和元（2019）年度は171人、令和7（2025）年度の推計値では51人となることが予想されるとともに、校区の広さも比較的狭く、多様な仲間と共に人とつながる力を身に付ける「横のつながり」を創ることや、異年齢や異学年等との関わりによってできる「縦のつながり」を創ることが難しくなることが想定され、早急に対応する必要があると考えます。

また、より効果的な「縦のつながり」や「将来の自分とのつながり」を創るための手段の1つとして、第四中学校と脇田小学校が隣接している点を活かし、施設一体型の小中一貫校（義務教育学校）を設置することも期待できます。

加えて、「快適で楽しく過ごせる学校」という観点においては、脇田小学校は、昭和47（1972）年に建設され、既に築47年が経過し、改修や建替えを行う時期に来ている現状があります。

そこで、隣接している脇田小学校及び第四中学校の敷地を活用し、現在、第四中学校校区にある脇田小学校、砂子小学校及び第四中学校を統合した施設一体型の小中一貫校（義務教育学校）を設置することを提案します。

【期待される効果と留意点】

これにより、これまで以上に多様な人間関係の中で様々な考えに触れる機会が増加し、門真のめざす「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育」をより実践できるとともに、快適で楽しく過ごせる場としての学校が創られることも期待できます。

なお、第四中学校校区には、この新しく創られる施設一体型の小中一貫校（義務教育学校）において、門真のめざす教育を先導的に実施し、門真市内の他の学校へ発信するリーディング校となることを期待します。

(2) 第四中学校校区、第五中学校校区の校区変更について

【現状を踏まえての提案】

門真市では、東小学校においてのみ、2つの中学校に分かれて進学するという現状があります。東小学校に通っている児童の多くは第五中学校に進学しますが、江端町から東小学校に通っている児童は第四中学校へ進学することとなっています。

「人とのつながりを創っていく」という観点から、このように2つの中学校に分かれて進学するということは、小学校6年間で創られた「横のつながり」が希薄になることが懸念されます。また、「縦のつながり」を効果的に創るためには、9年間の一貫性、系統性が大切であり、門真市が進めている小中一貫教育の観点からも、小学校単位で中学校の通学区域を定めることが望ましいと考えます。

そこで、東小学校から2つの中学校に分かれて進学するという現状を見直すため、現在、東小学校・第四中学校校区である江端町を、具体的提言(1)の新統合小中学校校区、または東小学校・第五中学校校区のいずれかに統一することを提案します。

【期待される効果と留意点】

これにより、小中一貫教育の取組がこれまで以上に効果的なものとなり、9年間の系統的な学びの中で子どもたちが成長することが期待できます。

なお、どちらの中学校校区に統一するかについては、本審議会では、幹線道路の1つである府道八尾枚方線の立地や新統合小中学校の配置に伴う通学距離等の観点から新統合小中学校校区とすることが望ましいと考えます。ただし、現在の子どもたちのつながりや、地域のつながり、通学路の安全、通学距離の問題等も含め、地域住民の意向も十分に踏まえながら共に検討していくことが必要だと考えます。

(3) 第五中学校校区の再編について

【現状を踏まえての提案】

学校の再編にあたっての基本的な考え方に基づき市全域を検討したところ、「人とのつながりを創っていく」という観点においては、第五中学校校区の北巢本小学校の児童数が令和元（2019）年度は162人、令和7（2025）年度の推計値では142人となることが予想されるとともに、校区の広さも比較的狭く、多様な仲間と共に人とつながる力を身に付ける「横のつながり」を創ることや、異年齢や異学年等との関りによってできる「縦のつながり」を創ることが難しくなることが想定されます。

また、「快適で楽しく過ごせる学校」という観点においては、四宮小学校は昭和40（1965）年に建設され、既に築54年が経過、北巢本小学校も昭和49（1974）年に建設され、既に築45年が経過しており、改修や建替えを行う時期に来ている現状があります。

そこで、両校の改修あるいは建替えに合わせ、四宮小学校と北巢本小学校を統合し、「門真のめざすこれからの学校づくり」に対応した小学校を配置することを提案します。

【期待される効果と留意点】

これにより、子どもたちが多様な人間関係の中で人とつながり、学びを深めることができるとともに、快適で楽しく過ごせる場としての学校づくりの実現が期待できます。

なお、本審議会では、校地については、小中一貫教育を一層進めるための小・中学校間の距離や、これまでの学校分離の歴史等を踏まえ、現四宮小学校校地に配置することが望ましいと考えますが、新たに国道163号や府道八尾枚方線といった幹線道路を横断することになる地域が生じるため、児童の通学上の安全確保については細心の注意を払うとともに、地域と共に十分に検討していくことが必要です。

5 これからの門真の学校づくりについての留意事項

(1) 具体的提言の実現に向けた速やかな実施方針等の作成

子どもたちにとってのより良い教育環境の整備や、市全域のこれからの学校づくりを考えると、適切な順序性を持ちつつ、できるだけ速く整えていく必要があります。今回の具体的提言について速やかに実施方針等を作成し、着実に進めることが重要です。

(2) 通学上の安全確保

安心・安全な学校であるためには学校施設の充実はもちろんのこと、児童・生徒の通学上の安全確保についても最大限の努力が求められます。

(3) 地域コミュニティの再編・充実

学校・校区の再編は当該地域コミュニティの再編にもつながることから、地域の現状を踏まえつつ、地域間の連携や融合の視点を持って進めなければなりません。また、地域行事等において協力連携を図るなど、地域の特性を活かした学校を、地域と共に創り上げていくことが重要です。

(4) 地域みんなで考える学校づくり

子どもたちはもちろんのこと、地域の人にとっても快適でワクワクする学校であるためには、地域の方々の思いやニーズを踏まえた学校づくりを進める必要があります。それぞれの地域で、これからの学校について話し合う場として、既存の地域組織の活用や、コミュニティ・スクールの導入も視野に検討していくことが重要です。

(5) 市全域のこれからの学校づくりに向けた継続的な議論

これからの学校づくりを市全域で進めていく必要があります。市内を見渡すと、今回は具体的提言に至らなかった学校についても、築年数が経過していたり、今後、児童・生徒数の減少等が懸念されたりする学校があります。また、これからの市内の開発等による街の姿の変容も考えられることから、引き続き様々な角度から、子どもたちにとってより良い学校のあり方を考え続けることが大切であり、継続的に議論することが重要です。

おわりに

本審議会では、門真市教育委員会より諮問を受け、平成 31（2019）年 2 月から令和 2（2020）年 2 月に至るまで、計 8 回の審議を行いました。

審議会には市民、地域、PTA、学校、学識経験者といった様々な立場の委員が参加し、毎回、それぞれの立場から忌憚のない意見が述べられ、活発で盛りあがりのある会議となりました。そこには、委員全員が人懐っこい門真の子どもたちが大好きであり、子どもたちを多くの人たちでよってたかって育んでいきたいという強い思いがあったように感じています。同時に、将来の子どもたちのために、これからの新しい学校づくりを考えられるのは今の大人しかいない、という強い責任感も持ち、子どもたちの将来のために何が大切で、そのために何ができるのかということ、委員をはじめ、門真市教育委員会事務局も含めた全員が未来志向で話し合い、たいへん充実した審議会となりました。

こうした熱い思いを持ち議論した結果、門真のこれからの学校づくりの方向性と、その実現に向けて、優先的に進める必要がある事項について、3つの具体的提言として答申することといたしました。門真市教育委員会におかれては、本答申の趣旨を十分尊重され、「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育」という門真のめざす教育の実現に向け、教育内容の充実はもちろんのこと、今回議論した学校づくりの視点に立った学校の配置や学校施設の充実についても取組を進めていただきたいと考えています。

さて、本審議会では子どもたちの将来のためにという観点で話を進めてまいりましたが、やはり地域から学校がなくなると感じてしまう地域住民の方もおられると思います。その地域の方の「子どもが大好き」「学校が大好き」という思いを大切に、さらに愛着を抱いていただけるようなより良い学校づくりをしなければなりません。そのような観点でいくと、「適正配置審議会」という会議の名称は、現在の学校が適正ではないという印象を与えてしまいますので、今後は、門真の子どもたちの将来に向けての学校のあり方を検討するという、前向きな会議の名称に変更していただければと思います。

最後に、これまで本審議会にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、門真の子どもたちの未来がますます明るいものとなることを切に願っております。

